

「一石五鳥」被災地の試み 樹植→土盛りで盛りがれ

東日本大震災の被災地沿岸部で、植樹して森をつくる「森の防潮堤」構想。震災後に提唱され、巨大なコンクリートの防潮堤に代わる役割が期待されたが、思うように進んでいない。そこには、役所の「コンクリート信仰」が立ちばだかっているという。津波の甚大な被害を受けた宮城県気仙沼市にその「森」を訪ねた。(荒井六貴)

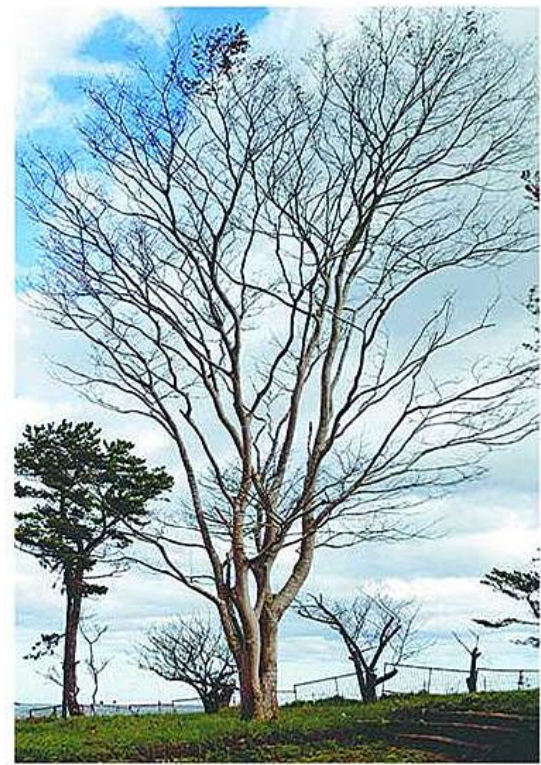
命救ったケヤキ

「二十秒くらいだった。気仙沼市の中心部から苗が、植樹から一年で一北に約十キロの波路上地帯を超えた。カキやクリ区。太平洋に半島が突き出したような地形。高さしめて、守りたくなるよ。五層、長さ百層のコンクリート造りの防潮堤はあんな森をつくりたい」

リート造りの防潮堤はあんな森をつくりたい。リート造りの防潮堤はあんな森をつくりたい。リート造りの防潮堤はあんな森をつくりたい。リート造りの防潮堤はあんな森をつくりたい。

治理事長(五三)は、このように希望を語る。

同県松島町では、松島



津波から12人の命を救ったケヤキ。⑤「不必要な防潮堤はつくる必要はない」と訴える菅原信治さん。後ろは、津波で防潮堤が破壊された沿岸。宮城県気仙沼市で。



湾に浮かぶ名勝の島々に、津波の勢いが弱

がしがみついて生き残る

波路上地区では津波が来襲したとき、高さ二十

「鎮魂の森」からは、太平洋の海岸線を眺めることができる。実は、国や県、市は、海岸線に高さ約十層、長さ百層の防潮堤を計画している。

菅原さんは「防潮堤ができる」と水平線が見えなくなる。役人は、どこでも同じように防潮堤を造るつもりだが、それが次世代のための街づくりといえるのか」と疑問を呈す。「大事なのは自然の力。コンクリートの防潮堤は、森から海に栄養分を運ぶ地下水を遮断し、海を腐らせる」と憂う。

国土交通省や市は「数十年から百数十年に一度の津波」を防ぐことを目的に、市内に最高一四・七層の防潮堤八十七カ所の整備計画を示すが、うち二十二カ所では住民の合意は得られていない。

「森の防潮堤」阻む壁

孫の代を超え持続

従来のコンクリート造りの防潮堤の代わりに、震災がれきで造った盛り土に植樹をする「森の防潮堤」構想は震災直後、宮脇昭・横浜国立大名誉教授(植物生態学)が提唱した。

東日本大震災でも、福島県いわき市で、森によ

きを混ぜた盛り土を築き、そこに地元で生息するタブノキやシラカシなどの広葉樹を植えて、十

「コンクリートがなくても森の防潮堤で津波の被害は小さくできる」と話す宮脇昭横浜国立大名誉教授(横浜)で

宮脇名誉教授は「強靱な国土を造るのは、コンクリートや鉄ではない。コンクリートの耐久性は百年に満たないが、森は孫の代を超え、次の氷河期が来るまで持続できる」と主張する。「森の防潮堤」の強みは、津波の水位と速度を落とし、避難する時間を稼げること。人が引き水にのみ込まれても、樹木で食い止めることもできる。広葉樹は根が深く倒れにくく、維持管理にも手間がかからない。



果的に放射性物質を移動させることにもつながった。宮脇名誉教授は「地元でがれきを利用するのが、一石五鳥にも五鳥にもなったのに、聞いてくれない」と嘆く。

横山准教授は「技術的にできる」ということ、街づくりは別な話。コンクリートを必要とする地域もあるだろうが、住民の反対を押し切り、進めべきではない」と指摘する。

国・自治体 コンクリートに固執

宮脇名誉教授らの呼び掛けに各地のNPOなどが動き、これまでに、少なくとも岩手、宮城、福島

宮脇名誉教授らの呼び掛けに各地のNPOなどが動き、これまでに、少なくとも岩手、宮城、福島

強度計算に頼り

「森の防潮堤」は、震災がれきの処理に役立つという期待もあった。だが、環境省は全国の自治体に見れば、海も陸も死んでしまつことになると



福島県南相馬市では多くの市民らに参加し、2万本を植樹した。10月6日